

展示してみよう！

魅(み)せ方・ 観(み)せ方・社会へのつなぎ方

阪本 幸円氏の講演の内容よりピックアップ

「アールブリュット」とは

芸術文化によって傷つけられていない人たちによって制作されたものであり、知識人の場合とは異なり、模倣がほとんどあるいはまったくない作品のことだ。従ってその作者たちは、すべてを自分自身の奥底から引き出してくるのであって、古典的芸術や流行の芸術という月並みな作品からではない。

そこには作者によってひたすら自分の衝動から、あらゆる面にわたって完全に作り直されたまったく純粋で、なまの芸術活動が見られるのだ。
(ジャン・デュビュッフェ・フランスの画家)

「アール・ブリュット」とは

「正規の美術教育を受けていない」人の作品という言い方があるが・・・

作家が評価を求めておらず、独自の様式・目的を持っていて、身の回りの素材を使っている、美術史の記述の体系の中には含まれていない(優れた)作品 明快な定義が成立しないのが「アール・ブリュット」

(アートかアートでないかは究極的には主観的)

滋賀県立美術館ディレクター(館長) 保坂健二郎

戦没画学生慰霊美術館「無言館」館主 窪島誠一郎(NHK の番組から)

絵は花を描いても夕焼けを描いても人を描いても、描こうとするものを愛していないと描けません。絵というのは典型的な平和のあかしであり愛のあかしです。描いた人と描かれたもののデートの時間なんです。記録なんです。大好きな人とのデートの時間を刻みつけるすごさ。人間なんですよ。そのすごさを持っているのは。

「生み出すこと(つくる・描く)」は「生きること」であり「愛すること」である。



作者 ・好きなものを好きなようにつくる(描く)。

・展示されることを喜ぶ人もいれば、全く関心の無い人もいる。

企画者(展示者)

・展示は制作者の支援というよりコラボレーション。(保坂健二郎氏)

・展示作品はオーケストラが奏でるシンフォニーのようなもの。

(窪島誠一郎氏)

鑑賞者

・作品(絵)の前で色々な人が感想を述べ合うことで様々な意見を共有し合い、自分自身のみならず作者や他者に関心を向けることができる。

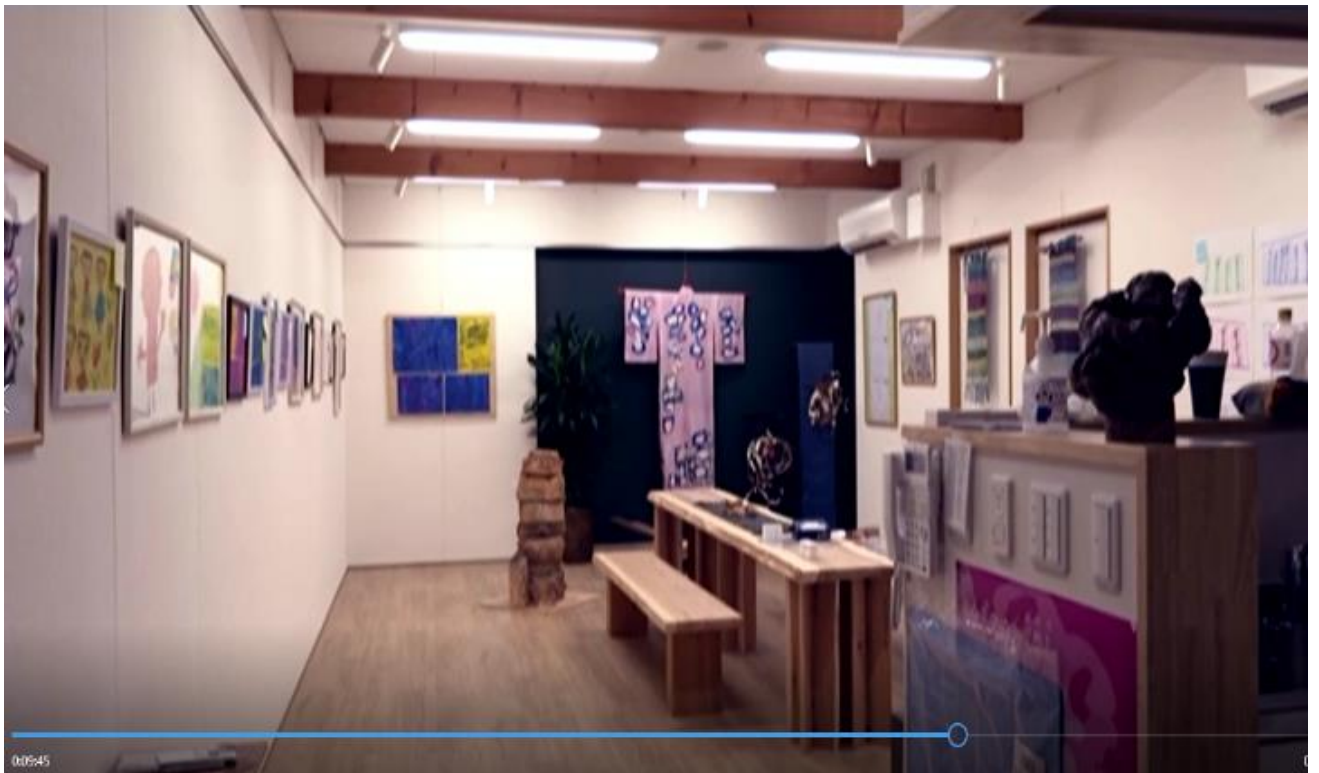
作者が作品作りを楽しむように企画者(展示者)は楽しんで展覧会をデザインしてください

展示の実際: Gallery & Activity Hall 風「わくわく展」の解説

展示してみよう! ①作品の選定 ②展示準備 ③会場展示



展示前の様子



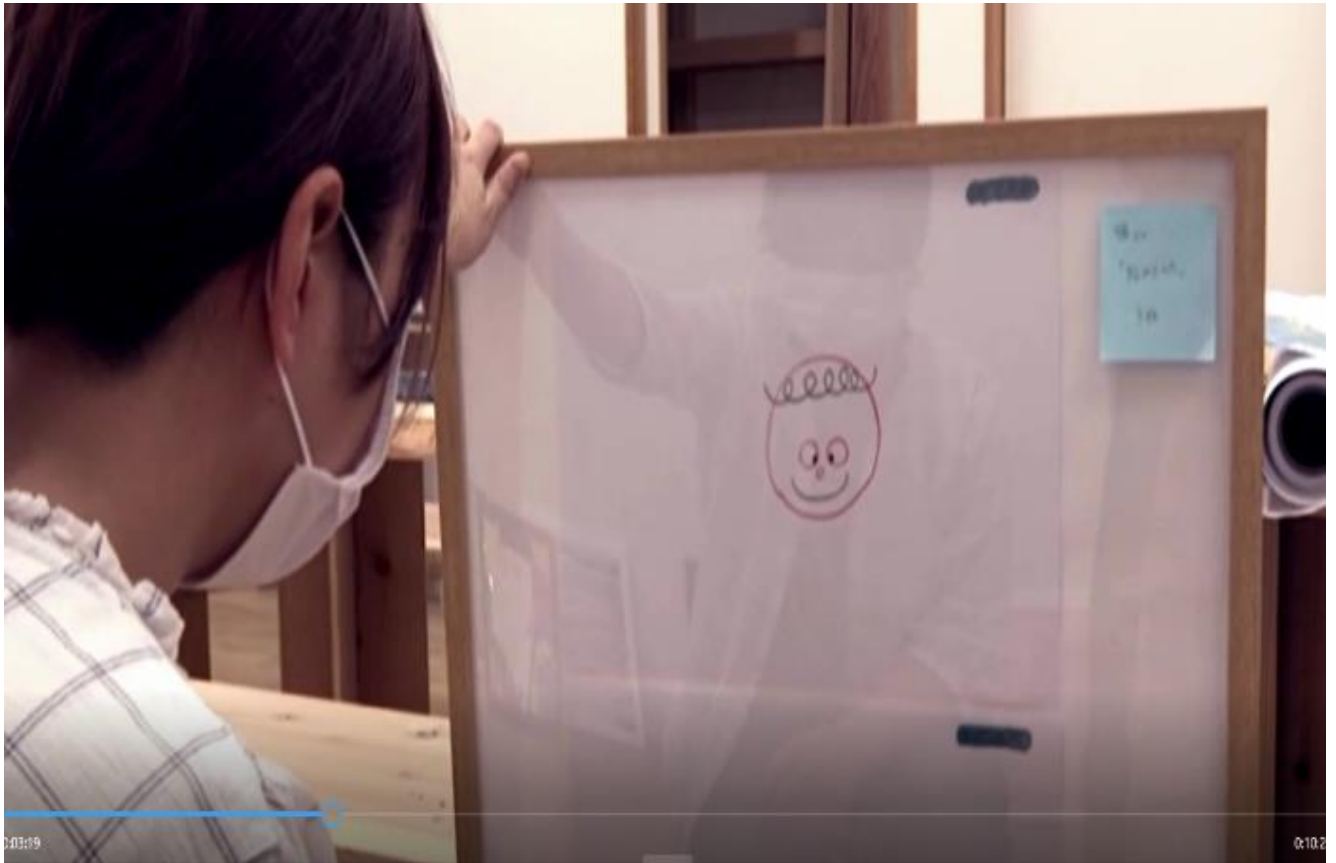
展示後の様子



「ひっつき虫」を使って、作品「はたけ」を12枚展示した。



絵の配置順、額装を考慮し、それぞれが観やすいように配慮した。



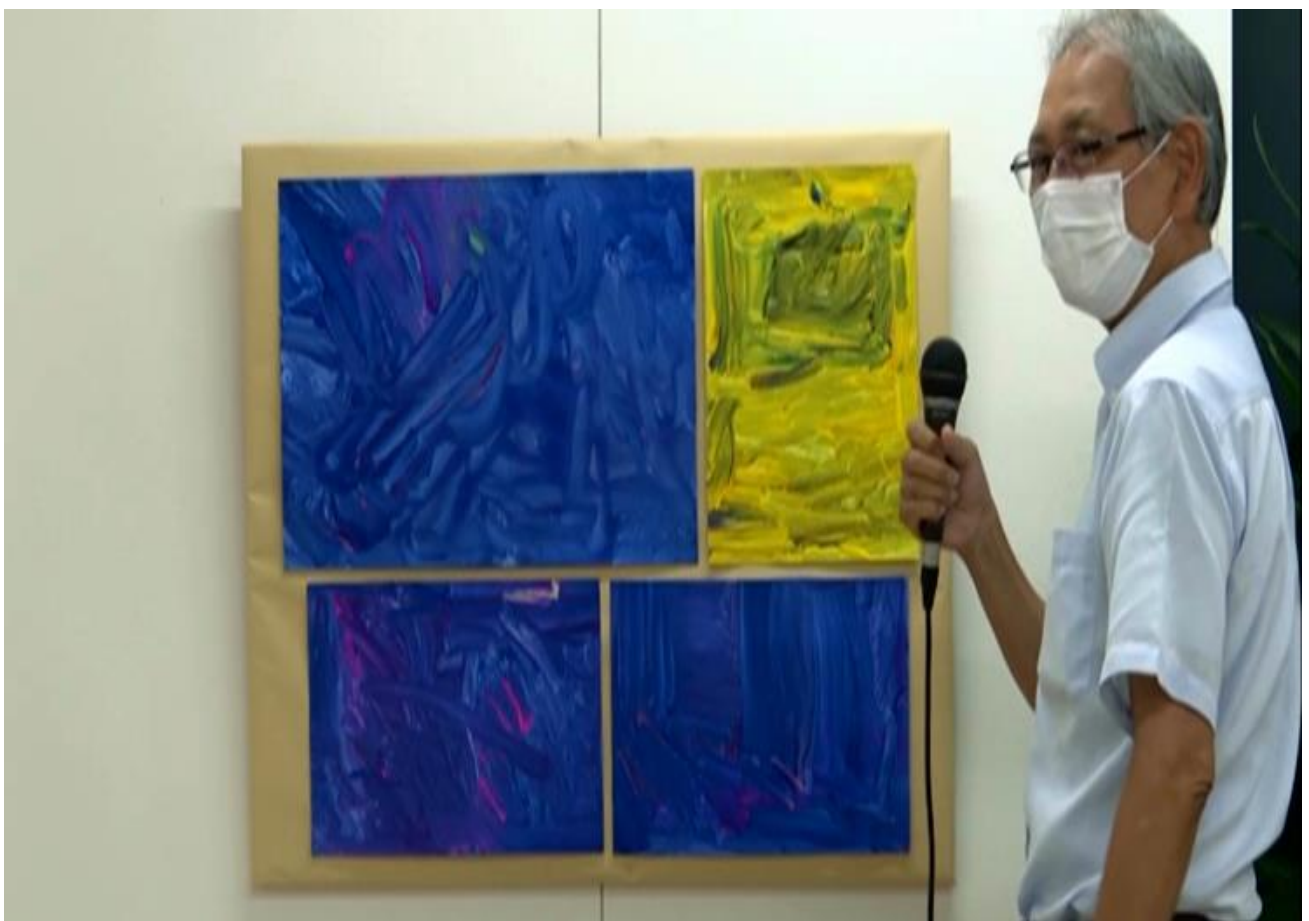
絵の背景に色紙を持ってくると作品がぐっと引き立った



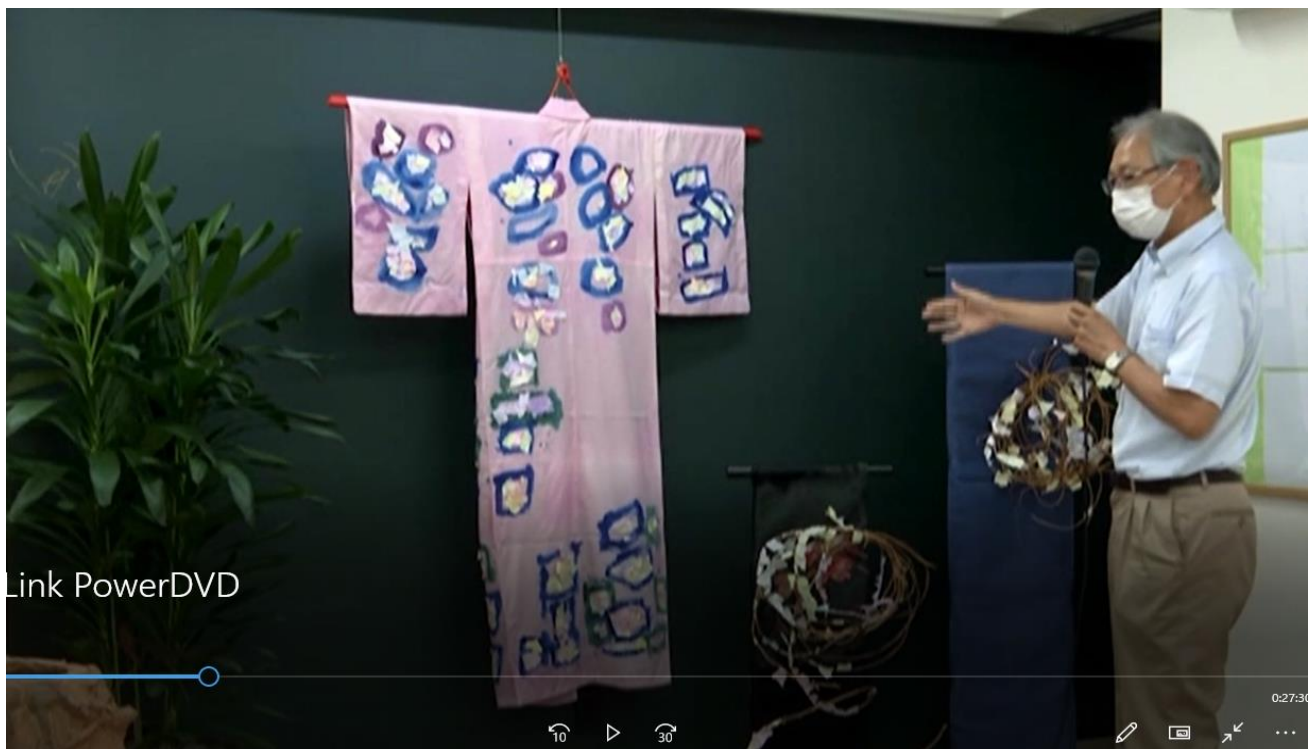
いつも作風は右作品だが、左は同一作者の新たな作風として2作品を並べて展示した



一枚を選びきれず、8枚中4作品を選んだ。ボードに紙を張り付けその上に展示をした。



絵の質感は伝わるが、鑑賞者が直接作品に触る恐れはある



暗い壁なので着物の色が映える。少しスペースがあるので立体作品の展示コーナーとした。

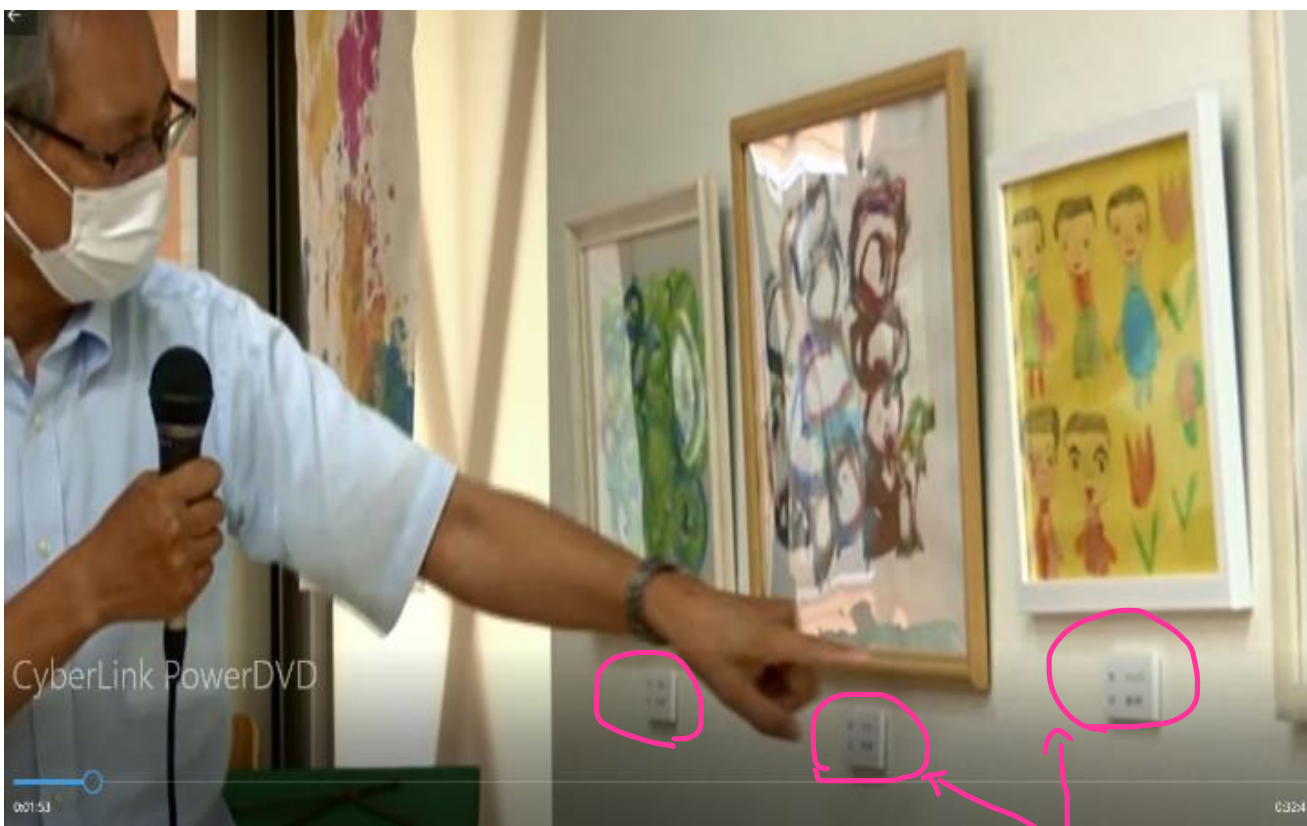


壊れやすいものに「作品には触れないでください」と掲示した。

逆に触ってほしいものにはその旨を掲示するとよい。



床から 140cmが中心となるように展示準備の時に目安となるひもを張り目印にした。



キャプションは各作品同じ形式(題、作者名、材料など)で書き、同じ位置に貼り、統一する。

今回は作品の中央、影の下にあわせた。

Gallery 風「わくわく展」の準備、解説について

今回の研修で実際の展示について解説をしていただくために、展示をしているところを事前に撮影することにしました。作品についてはハスの実の家の利用者さんの作品でよいのではないかと阪本先生がおっしゃってくださったので、ハスの実の家で利用者さんの絵の制作に携わっている職員の橋本裕美子さん中心に「わくわく展」の準備をしてもらいました。

急遽、初ディレクターとなった橋本さんに取り組みについて書いてもらいました。

●絵の選定で悩んだこと

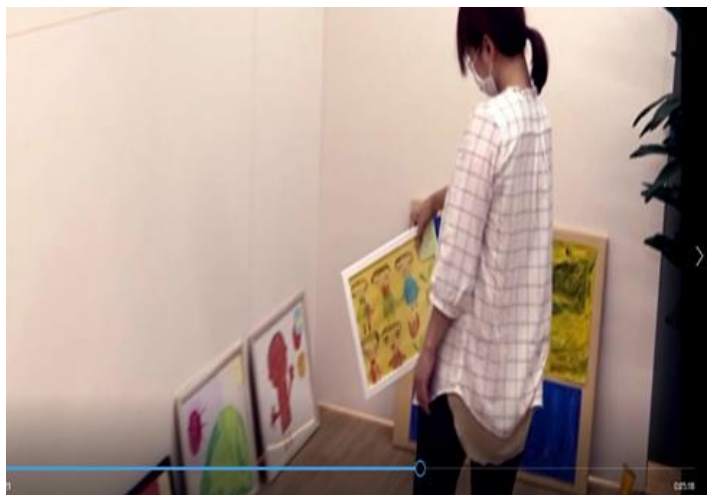
ハスの実の家の利用者さんの絵が21点あり、それぞれ作品の大きさや材質、形が違うため、どの順で並べると観に来られる方は観やすいのか。インパクトが残るかを悩みました。

先生の助言を受けて、おこなった展示のポイント

- ① 今回チラシで使った絵を一番最初に飾り、展示のテーマカラーとして打ち出しました。
- ② 人物、風景、食べ物、乗り物など、描かれている物がバラバラだったため、絵の対象物が重ならないように展示しました。(人→物→風景など)
※ずっと似たような絵が並んでいると、観る人の目が慣れてしまい、1枚1枚見づらくなってしまいうから・・・という先生の意見を参考にしました。
- ③ 最後は作品の色合いや大きさを見ながら、自分の感性で展示をしました。

●作品展の展示をしてみても・・・

- ・立体的な作品があることで、会場の雰囲気は全然変わるんだなあと思いました。
- ・会場全体を見ながら、この作品はここに並べるといい、つるしてみたら面白いかも？1つの壁に1作品にしたなら、スポットがいくかも・・・など、障がいのある利用者さんの作品の魅せ方をたくさん考えることができ楽しかったです。
- ・今回、原則ひとり1作品の展示ではありましたが、「はたけ」の絵を短時間で一日に何枚も描き上げる利用者さん(作家さん)がいて、作品数が多いため、12枚の集合体で1つの展示にしました。作品を大きな壁に並べて展示すると、「はたけ」の絵の描き方が全て違って、作者がどのような気持ちで、何を思い出して描いていたのだろう・・・と、改めてその絵をみることができました。次は名刺サイズくらいの小さい紙を作家さんに見せて、その紙に描いてもらい展示したら面白いかも・・・など、自分の中でも今までにないイメージが出てくるようになりました。
- ・阪本先生が展示のいろんなノウハウを教えてくださいましたので、大変勉強になりました。ただ、飾るだけではなく、作者の制作時の様子を聞き取りしながら、絵の良さを活かす展示方法を一緒に考えてくださり、一つの作品と丁寧に向き合う大切さを学ばせてもらいました。



ハスの実の家・橋本 裕美子